

Title	池田弥三郎著『高市黒人・山部赤人』
Sub Title	Yasaburo Ikeda : Takechi Kurohito ・ Yamabe Akahito
Author	檜谷, 昭彦(Hinotani, Teruhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1971
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.30, (1971. 3) ,p.70- 78
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00300001-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

池田弥三郎 著『高市黒人・山部赤人』

檜 谷 昭 彦

大和から吉野へはいる道のひとつに芋峠越えがある。峠の名称が妙なのと、実際にこの峠をあるいたときの鮮烈な印象とで、いまに忘れぬなつかしさが私にある。へいも峠／（「忌む峠」ではないかとも考えられるがよくわからない。）は、なだらかな勾配で大和と吉野の境界点までゆったりとした道幅がある。道が右に折れて峠の鼻を曲る少し手前で、思い切ってふりかえるとずっと向こうに大和がやわらかくひろがってみえるのだ。そのまた先きのほうに二上山が浮かびあがる光景は、まことに結構な絵であった。それですぐ峠の鼻を曲り切ると、こんどは眼前に蒼古たる山容を連ねて、吉野の連峰が雲海とともにいちどきに見渡せるわけで、つまり山の峠の鼻のところでもちょっと区切られるこの展望は、峠の尾根に登りつめれば、まさに三百六十度の視界で吉野の山容と大和の山なみを見較べることが出来るものなのだ。標高五百米ほどの峠であるが、この眺望は限りなく美しいし、万葉びとがはじめてこの峠に立って、吉野の連峰を見たときの驚きを想像すると、そしてまたおだやかな大和のたたずまいの奥に浮かぶ二上山の姿を思うと、もういちど行きたくなつて、ことしの万葉旅行のコースに加えて貰ったほどのだ。あの峠でならひとりで恋びとのことを思ってもよい。これはつまり「妹」思う峠ではないかとまでこじつけたくなる。私は以上のように思っていた。

こんど出版された池田教授の『高市黒人・山部赤人』に、まったく専門外の私があえて書評を書くことにしたのは、上記の回想が触発した古代への回帰の感情にあったのだろうか。たしかにそれもある。理由はもうひとつある。常にものごとの結果について、その判定を下すとき、理由づけは真実抜きさしならぬ重要さでそこに存在するのは自明のことだ。ただ以下に述べることは△理由づけ▽ではなくて、私の実感でありその意味でのひとつの△理由▽である。

著者は『ちくま』一八号の「わが万葉の記」で次のようにいう。

あとは、定年退職までの十年間を、研究を主とした生活で充たしたい。また、そうしなければ、わたし個人は何の生きがいもない。その出発点に、『黒人・赤人』篇を書くことは、書かせてもらえることは、むしろ、天佑的なこととみるべきかもしれない。(二八頁) 事実、著者は本書執筆にあたっては二カ月、信州の山荘に閉じこもって「実に楽しく、また苦しく、時間をかけて書き上げた」(同二八頁)という。私なりの解釈を加えれば、本書は著者にとって、あるいは処女論文を書くが如き思いを抱かせたのではないかと考えられる。つまりここには著者にとっての自己確認がなされているのであって、そうした場合、私の書評は多かれ少なかれさまざまな読み誤りを生むかも知れぬし、そうではないかと心配である。

ところで、著者には最近もうひとつのエッセイがあって、著者の履歴が普通の大学人の歩みと逆行していることを述べたあとで、「わたしは、わたし流に考えている『あそび』を、誰に遠慮もせず、真正面に打ち出すことのできる『余生』を迎えたのである。」と書いた(『余生』と勝海舟』月刊エコノミスト八月号一一八頁)。

勤務先の役職を歴任し、学位を取り知名度も高い人間が、こういう感想を書き、さらにういういしい書き下ろしの論文を発表するというこの意味は何か。著者は「あそび」という。「あそび」は、ここでは△文を学(まね)ぶ▽ことである。近世風ないい方をすれば△学文(がくもん)▽である。そして、それは大学人としてまさにあたりまえのことでもある。しかし、その△あたりまえ▽なことが、何故かくもすがすがしい印象を与えるのか。この反問がそのまま私にとっては、本書を書評しようとした理由なのであった。

以上のことを前書きととられては困る。私の書評はすでにはじまっている。前記の△いも峠▽はまた大和の平原を流れる飛鳥川の

水源でもあった。本書に著者が述べているように、そこから栢の森へ流れ落ち、稲淵へ出、島の庄を貫流して飛鳥の神丘のほとりを通過するのが飛鳥川である。してみるとこの峠は、吉野と大和の国境であり、分水嶺（みづか）であり、大和の水源であり、飛鳥の神丘に至る水の道であった。すでに折口信夫説に「水の女」の想定がある。その連想から古代の水神を思い浮かべれば、水の神と「へいも峠」の関連が結びついてくる。著者は触れていないが、万葉集巻七には、

神さぶる磐根こごしきみ吉野の水分山を見ればかなしも（一一三〇、国歌大観番号以下同）

なる歌がある。水分山は「神さぶる」のだ。さらに、この歌の結句「見れば悲しも」は、その結びの形式の類型を、巻一・二九、同三二、同三三、巻二・二一八、三〇五、同四四九、四五〇、同四六八、巻九・一七九六、一七九八、一八〇一、一八〇六、一八一〇、巻一九・四一四九、などと拾い得るのであり、これらの歌が歌われた場所は、すべて、死者の奥津城・荒廃した宮殿・家屋・荒れた土地に関係が求められ、そうした場所を通過するときに歌われた歌という状況が明記されているのである。昭和二八年六月一九日、大学院古代特殊講義で折口教授は次のように語った。

昔の人の考えでは、過去に建てられた古い建物の建ち残っている所を大変気にしたのです。そして何時までも古い建物を取り壊さずに残して居ました。六条河原院は源順の旧宅ですが、これを頭に置いて「夕顔」が成立します。この院はお化けが出るといふ噂があったからです。だから古い建物の傍を通るときは、弔って通って行きます。そのデエモンを鎮めて通るのです。デエモンを鎮めるための歌が万葉にも多いのです。（私の講義ノートによる）

さらにこれらの歌は、常に水のある場所を契機として、「見れば悲しも」という発想に結びついていることを考えねばならない。いくつかを例証すれば、

218 罷道の川瀬の道

449 敏馬の崎

1130 水分山

遊びし磯

黒牛瀉

などであり、「みそぎ川河瀬の神にことふれてまたこそ知らね恋の心を」(『堤中納言物語』)の歌や、岬の語義が「海中に突出している崎は、海上からの神がよりつき易い処であり、神のいることが多いために、御崎と言ひ、それが常用されたために、いつか一語としての『岬』となった。逆に、そういう語から、そういう場所が神の居処として考えられていたことに、思いあたるであらう。」(本書、一五「敏馬・野島」の章、一五二頁)と説く著者の文章からして、これらの歌群が国つ神や水の神の鎮魂歌としての要素を有しているものだと考えられはせぬか。以上は私の気儘な考察であるが、著者は本書一八章「吉野―黒人の歌を中心に―」で、大和・吉野間の道の最重要なコースに、「芋が峠」(著者はそう書いている)越えを指摘し、この辺が「かむなびの神」の通路であったと説いているのだ。著者には別に『かむなび私考』なる論文がある(『わが師・わが学』昭和四二年四月桜楓社刊)。この論は「中山」の考察と深く関わりをもち、神のよりつき所として「中山」を規定しようとする大胆な考察に展開して行くものだが、「かむなびの神」が飛鳥の神丘に來臨する途上で、この「芋が峠」すなわち「中山」によりついたと推定する論の支えに、「芋が峠」を「象の中山」ではないかと結論する考察(本書一九章「象の中山」、二〇二頁)を加えているのである。

以上の私の読解が妥当であるとするならば、著者の論理の帰結するところは、当然、「かむなびの神」が水の神と関わりを持たねばならない。同時に「象の中山」たる「芋が峠」は「水分山」でなくてはなるまい。著者は本書の性格(『日本詩人選』第三巻という制約)からして、敢て専門的な考証を避けたのかも知れぬ。そこで私にしてみれば上記の問題をも含めて著者の見解をあらためて求めたい気がする。

大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びぞ越ゆなる(巻一・70、黒人)

の歌意が著者によってみごとに解明された喜びと同時に、そうした感想が私にあったことをまず書いておこう。「象の中山」は「いも峠」であり、「いも峠」は水分山であり、水分山は神さぶるよりつき所であり、その神は水神であって、しかもここは国境であった。大和から吉野へ向かう万葉びとは、この峠に立って吉野の神秘的な山容に心うたれたことでもあろう。これは、私の空想である。だがしかし、この空想を齎したのは他でもない、著者の著述がその元兇である。このことは近世文学の学徒である私が、同時に折口信夫の最後の大学院生であったことにも因由があり、さらに私の一知半解な知識がなせるわざであるのは是非もないことである。

私の疑問はもうひとつある。しかもこのことを書くのは私自身にとっての反省となること少なしとせぬ。著者の論証に対する私のさやかな疑問とこの感情との相関について以下に書く。

著者は二二章「数字の興味」に於いて、卷一六の「一二の目にはあらず五六三四さへありけりすぐろくのさえ」(三八二七)の歌を引き、この歌を含む一連の歌群の左注によれば、「当時の、大陸の学問、教養に触れた知識人のグル、プの生活の一面が想像できる。」(二二〇頁、圈点筆者)と説き、万葉びとの宴会は、「古代の靈魂信仰に根ざした宗教的行事であったが、すでに一方においては、そういう知識人達の、いわば風雅な遊びごととしての『宴飲の集い』などもあり、その『機会』には、その場の座興として、さまざまな歌を試作して、文人の戯遊を行なった様子が、想像できるのである。」(二二〇頁)と述べている。さらに次章「宴会の妻の歌」には、長忌寸奥麻呂の文人趣味の宴会の歌を基として、「卷十六の成立への、当時の知識階級の人々の参加は想像されるところだから、黒人が、卷十六所載の、この、猪名野の文芸を知らなかったとは、言えない。」(一三四頁)とする。その論旨をたぐれば、黒人も外国思潮の洗礼に浴した知識人の一員であって、中国文芸の詩法を学んだひとりであったと考えてもよいであろう。私はこのことを重視したい。私は従来、人麿や黒人の詩人としての偉さは、古代信仰と外来文芸思想とを日本文学のうえに統一したところにあると考えていた。

著者は二二章の「赤人従駕の歌」で、額田王の「熱田津に船乗りせむと月待てば」の歌を引き、船上の鎮魂を再説したあとで、「平安朝に到って、『船追遙』と言われた貴族の行事は、ほとんど完全に、遊楽と化しているとは言え、——中略——竜頭鵜首の船を浮かべて、

『三舟の才』(詩・歌・管絃を一人の人がこなしうる能力)を誇った、一見大陸好みの風流韻事も、単なる輸入の行事ではなく、少なくとも受容する素地としての信仰行事が先行していた。それが『船乗り』である。」(二三四—二三五頁)と書いている(圈点筆者)。この指摘は山部赤人の時代に到ると、もう中国文芸の影響が単なる外来の新奇な様式という範囲にとどまらず、すでに宮廷詩人の自家薬籠中のものになっていたことを言外に暗示した記述と受け取れる。はたせるかな著者は、二五章の「黒人・赤人の伝記」に於いて、持統三年紀に見える「撰善言司」についての考察から、これが「南朝宋の范泰の古今善言三十巻を模範にし、——中略——皇族・貴族の子弟の修養に役立てようとした」(日本古典大系・日本書紀下の補注)とする説を援用して、次のように結論しているのである。

要するに、黒人・赤人をもつて、宮廷詞人と言ひ、あるいは宮廷詩人と呼ぶことの背景に、日本式の、あるいは日本化した、撰善言司の存在を推定するならば、そこに、微官としての、黒人・赤人等の生涯が浮かび上つて来るであらう。黒人が、巻九に足跡を留めていることも、同じ、漢学の素養を持つ文人グループの一人だったからだらうし、赤人が、富士を歌ひ、真間の手児名を歌うことも、撰善言司の微官としての位置を考えることによって、一層納得がいくであらう。(二六三—二六四頁)

かくして著者の論は、少なくとも黒人赤人の両名に関して、その中国文芸との交渉をものはやまぎれもない事実として容認していると理解してよいであらう。

ところで終章「文学の発見」に於いて、著者は赤人の歌に、生活とはへだたった風流な「うその生活」を見出していく。そして『優美』なものを、生活味を犠牲にしても求める、というところに、赤人の到達し、発見した文学があった。(二七四頁)とするのであり、上記の文章につづけて、「これを継いだのが、古今集の文学であった。」と著者は書く。本書はここに終ると言つてよいだらう。

さて、本書をふりかえるとき、著者はここまで中国文学と万葉歌人との関連について言及し、しばしばその論は万葉歌人論の決定項を形成する前提とさえ目される要因を形成しつつあった。文学史家がいうところの国風暗黒時代とは、万葉集と古今集の間に介在する時代をさしている。それは漢文学隆盛の時代であり和歌空白の時期でもある。人麿・黒人・赤人とつながる漢文学の摂取・受容の努力と統一の開花のあとに、旅人・憶良の時代をへて、家持の時代に到つて万葉集は完成し、それはそのまま古今集までの暗黒期につなが

って行くことをどう捉えるか。これだけの事項をつなげれば、万葉歌人の中国文学摂取の努力は、つまりは国風暗黒時代への引幕を用意するためのものであったと言われなくてはならない。それは言いかえれば古代の歌の終焉に到るほろびの序章を黒人・赤人は歌ったことになるだろう。古代信仰と日本在来のことばの伝承と、中国風な表現と、その接点に立つてしかも宮廷詞人として歌わねばならなかった黒人・赤人の詞章の意味するものを、『詩経』『文選』などの中国文学との比較考証のうえに探る必要はなかったかどうか。私の主たる疑問はまさにこの一点に関わる。それは同時に、外国文学の影響を受け易いこの国の文学的風土を私に想像させる。そして著者のあそびはここに最も深く関わっているのである。

著者は本書に於いて、中西進氏や小島憲之氏の所論に言及するところがなかった。著者の論旨がこれら両氏の所説と相関するところでないことは了承しつつも、中西氏の方法を小島氏の確認を、まったく新たな立場から再検討する有力な武器を、著者は先師折口信夫から継承しているはずであると私は考える。

万葉集の原型とみられる巻一と巻三の半分は、それらの部立がどちらも雑歌であることは著名な事実である。その中には、前引黒人の歌（巻一・70）の、

大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びぞ越ゆなる

があり、呼子鳥の歌はさらに巻八・一四一九に、

かむなびの磐瀬の杜の呼子鳥いたくな鳴きそわが恋まさる

がある。しかもこの歌も雑歌に組み入れられている。「巻八には、『相聞』の部類が立ててあるのだが。」とは著者の文章である（『かむなび私考』）。その鏡王女の歌は、飛鳥の神丘の裾を取り巻くように流れる水流の、そのほとりの森に鳴く呼子鳥に呼びかけた歌ということになるとう理解されよう。作者が藤原鎌足の正室であるという以外には私にはわからぬけれど、著者の『かむなび私考』などから考えると、この「わが恋まさる」という歌詞の意は単なる恋の思いというだけではないようである。「呼子鳥」と「中山」「かむなび」の関連も微妙に呼応するようであり、著者が本書に指摘する「呼児鳥」「霍公鳥」「喚子鳥」等の万葉の表記には、漢文学との交渉がどの

ようにあったのかなかったのか、しかもこれらの歌が、「宴会の席における即興の歌として、会衆の同感を誘った」(一九章「象の中山」二〇五頁)とするならば、なおさら私には著者のこの事項に関する心象をたぐりたい思いがある。それは私ごとき一介の読者にとって単に望蜀の感であるのかどうか。

本文すべて二七六頁、私は読みはじめてから巻をおくことができなかった。そこに語られるほとんどは、私が所属する専攻学科で毎年訪れる研究旅行の土地に関連する考察であり、乗物ひとつ利用せずに歩きまわった土地土地の歌が説かれていた。それは私にとって近世の地誌を読むのにも似た興味を与えてくれたと同時に、本書を読み進む私の関心のありようは、非礼をあえてするならば、推理小説を読むのと似た興味の湧きようだったといえるようである。さらに読了後には、万葉集についての知識の飢えに駆られたことも事実である。二二三頁の薬狩りとの関連から夏の呼称「なつ」の語源に対する説明不足(と私は思う)が、やはり読者にとってはじれったいし、歌の鑑賞に折口教授の文章をこれほど引用するには及ぶまいに、と感じたことも事実である。

けれども著者はまた書いている。

本書は、折口万葉の再現のためのノートといった傾向が強い。わたしの場合、どうしてもそこから、はじめ直さなければならなかったのである(「わが万葉の記」二八頁『ちくま』一八号所収)。

著者は「はじめ直さなければならなかった」と書いた。これは「余生」の「あそび」をしようと決意した著者のことばである。もういちど先師折口信夫へ帰ろうとする著者の「呼子鳥」のさわやかな声であるかもしれない。

如上の意味で私は本書を読んだ。門外漢の私が勝手な言辭を弄し、気儘な感想を述べ立てた罪は私自身が負うて行く他ない。池田教授の達意の文章と論構成のみごとな結構とゆたかな情感と、それにもまして本書の学問的価値については専門の士が心ゆくまで批評してくれるであろう。いまは本書読了後に心をよぎった塾生時代への懐旧の情と、学問を志した人間のぎりぎりの想念とのふたつを、かかる文章に託して備忘としたまでのことである。非礼の段は切に御寛恕を乞う次第である。

書評対象図書

池田弥三郎著・『高市黒人・山部赤人』・日本詩人選第三巻・昭和四五年九月二五日発行・定価七〇〇円。

(在庫誌) 第二十号

筋馬考	井口樹生
万葉集における霍公鳥の歌	土田将雄
「物語」という語の二つの性質	大輪靖宏
婦有光の系譜	佐藤一郎
トマス・アケイナスの芸術観	高野啓一郎
チヨースーとテイル・ライム・ロマンス	岩崎春雄
アルペール・カミュの青春	片山左京

ほか九篇(うち書評六篇)所収

定価三百円 千六十五円